

## 第五卷終

## 海國兵談 第六卷

## 撰士附一騎前

人は不器を貴ぶとも、然れども人々萬藝に長する事も成り難し、但得手たる所一藝づつはある者なれば、其得手たる所を撰んで、夫々の職を授くべし、孝に五等あり、武も又五等ある心得にて撰むべし、是主將第一の工夫なれども、無學にては其器を撰ぶの道合點なき物なり、夫を合點するには多く書を讀て、和漢才智の人主、人器を撰ぶの跡を考へ見る時は誰教ふるともなく、人器を撰ぶの道合點せらるべし、然る故に人君第一の勤は多く書を讀て人君の武を知にある也、人君の武は平士の武と不同、偕撰法の大略を左に記す、猶工夫を加ふへし。

博文強記にして才智逞く、經濟に達し、口才に能く、骨柄宜き者は家老の職に任ずべし、武勇を第一として、兵道に達し、才智有者をは番頭に用ゆべし。

勇壯にして、おとなしく且物に動せざる者をば武頭に用ゆべし。

士卒の中、和漢の書を讀で、多く事跡を知りたる者を撰て一組と成し置くべし。

頓智頓才にして辯舌宜しき者を撰て一組と成し置くべし。  
兵道を心得、物見に心利きたる者を撰て一組と成し置くべし。  
多力勇氣の者を撰て一組と成し置くべし。

弓、鐵砲、弩弓等の上手を撰て一組と成し置くべし。  
早道、早態の者を撰て一組と成し置くべし。

天文、算勘等の上手を撰て一組と成し置くべし。  
水練、水馬等の上手を撰て一組と成し置くべし。

右の外撰ひ次第幾品もあるべし、總て此類の者をば平生重寶致し置て、軍事ある時は旗本は言ふに及ばず、番頭へも分け預けて肝要の用に備ふべし。

總軍兵を撰ぶの法は骨柄逞しくして一藝に長し、意氣壯なる者を上とす、藝能なくとも骨柄逞しく意氣壯なるを中とし、藝能なく、骨柄も逞しからずとも意氣勇壯なるは下撰に充べし、藝能なく、骨柄なく、意氣たはめる者は取るに足らざるなり、若し止む事を得ずして用ゆる時は火の番か飯炊の類なるべし。

右總兵を撰ぶの大概なり。

## 一騎前

一騎前の趣意は敵に當て勇壯なるを専らとす、吳子曰「進死爲榮、退生爲辱」矣と又謙信の書に眞精の鋒先は、鳴動の中に章疾アヤシと言へり、又同書に遮神劍と言ふ事あり、是は接戦の時は前懸りに成て、兜をば敵の劍に任せて飛込となり、如此なる時は軍神敵の劍を遮つて我身に恙なしと言ふ義にて、眞一文字に敵陣へ飛込事を主とするの教なり、是等を一騎武者接戦の大主意と心得べし、偕馬の乗方、物見の禮義、武者の詞、隠し字等の事は一騎前の奥の手にして、末に近き事なれば大略を知ても足るべし、左に其本たる要領の事二三を擧ぐ猶考ふべし。

六具と言ふに品々あれども、先一騎前の六具は胴冑、籠手、脇當、太刀、草鞋なり、此外大將の六具身堅めの六具、備の六具、番所の六具等あり、閑暇の時學び置べし。

上に言へる如く六具に品々ありて、悉く六つの數を用ふる事なれ共、是は龜藏六より出て、例の牽強フツケなるべければ、嚴しく六に限りたる事の様、に思ふは、柱コトナに膠の類なるべき歟、因て小子は一騎の六具に糲を加へて七具と教ふるなり。

身廻の堅は、下より始め、左を先、右を後とす、脱く時は上を初め、右を先とするなり。

鎧の絨毛、甲冑の名所等詳かに如くはなけれども大略を心得るも可なり、其故はこれ等の事に馴染む時は、要法を失する事あればなり、然しながら敵の容體を見覺て大將へ言上のため、或は射中り又は手負など、したる時のためなれば、右體の事を一圖に心得ざるは、第一の不足なりと知るべし。

組討のために、時々角力を取るべし、古代は角力も武藝の一件にして、武者の藝能を吟味する箇條中に相撲も入れたるなり、尤諸國より相撲人として有力の人を進めし事諸史に見へたれども、當世は歌舞伎同様の物になりて、相撲は武士の藝にあらずと思ふは不覺なるべし、都て組討は弱し、早く組むを善しと心得べし。

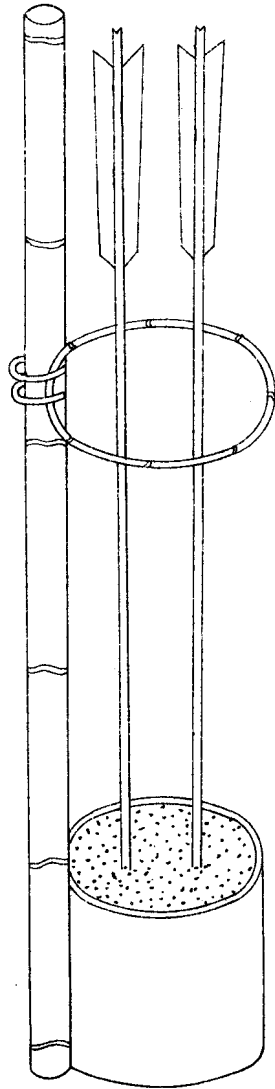
總て組討は早く右手指を折て、組ながら突くべし、忠度又は鹿之助等の組様を手本となすべし。

附異國人と組に數多の心得あり、先異國人に國々の差別あつて、人の大小、力の強弱各異なり、總て琉球、暹羅等の南人は骨柄、短少にして氣力も弱し、唐山も浙江、南京以南の人は琉球、暹羅等の人に準するなり、又山西、北京及び韃靼、朝鮮等の北地の人は、骨柄も壯大にして、力も日本人より強し、只氣象の鈍き計りなり、歐羅巴人は只丈け高き迄にして左のみ力もなく、氣象も鈍し、扱日本人と北地の異人等と

角力するを度々見たりしに、四つに組ては北人後へも退かず、脇へも倒れず、只前へ隙かして、なで落せは俯伏に倒る、又一つの心得あり、唐山人の武藝は蹴る事を第一に習ふて胸と膝とを蹴るなり、亦後膝トウネを能くするなり、又拳法とて握拳を以て眼を突くなり、此三つを心得居て蹴られず、突れざる様に早く身に寄せ附くるを第一とすべし、是唐山人と組の心得なり、武藝は定りなき物なれば何にても一藝に熟すべし、多藝に如くはなけれども、多藝を心懸る時は熟達し難き事あるなり、然しながら太刀は人々の帯ひざると言ふ事なし、此故に太刀打をば人々稽古あるべし、就中抜打の強さを尊ふなり、是太刀を學ぶの要法なり、太刀帯にて着たる太刀は抜難きものなり、直に帯へ差すを宜しとす、此類の事は仕來りの式法に拘はらずして自ら試て便利なるを取べし。

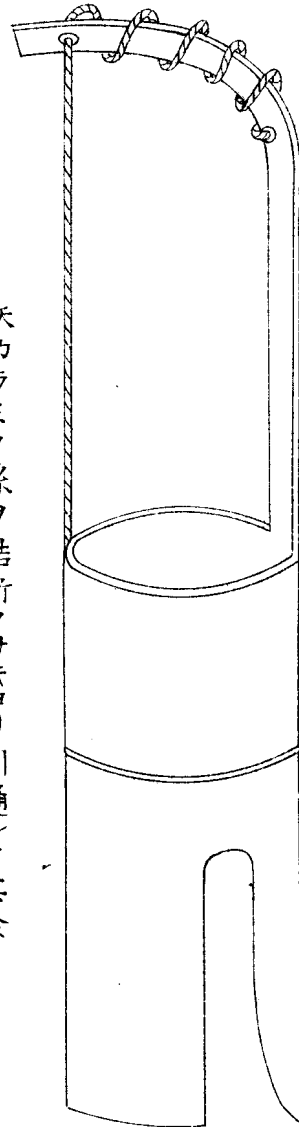
弓は半弓便利にして用に勝ゆるなり、就中馬上に利き有り、尤抜けも強き物なり、矢籠に三等あり、一は平生用ふるものなり、一は大竹を以て圖の如く拵ひべし。

細竹ヲ輪ニシテ子チカヘシニスル故矢シマル也



根タマリハ桶箱竹筒ノ類或ハ  
輪ヲ以テ平ククムヘシ

矢カラミノ糸ヲ拮竹ノサキヨリ引通シテ其余  
リヲ下ヘ引ツリ置ヘシ矢ヲ抜ハ竹ハ子上リテ  
糸シマル故残り矢抜落ス



コノハ葉ヲ入テ根タマリトス

當世の習ひにて、足輕は皆空穂を用ふる事なれども、うつほを腰に付くる時は、重くして働難く、殊に押行く時杯は大に草臥るるものなり、足輕に矢籠を用て軍に不便利と言事もなき事なれば、働易き爲に、空穂を捨て、矢籠を足輕に用ふべき事なり、是新制に似たれども、軍に便利ならば、何ぞ新法を憚かる事あらん、可制々々。  
桐油紙を以て長二尺計に袋を拵へて、雨天の時矢籠に懸くべし、尤平生懸置いて害なき事なり。

重き鎧を好む事勿れ、美麗に鍔りたる鎧は必ず重きものなり、總て一騎の出立は軽々しく出立べし、至極略する時は胴冑計りにも事濟む物なり、覺悟あるべし、勿論兜も輕きを用ゆべし、鎖鉢卷或は半首（ハジマ）の類にして鍛様の物にて後ろを覆へば事足る物なり、大立物等を用ふるは衰めたる事にもあらざるか。  
太刀は古作を好む事勿れ、只丈夫なるを貴ふなり、軍中には泰平の世の如く太刀、刀を玉の如く、玩物同様に大切に取扱ふ物にあらず、只敵を打ひしく鐵棒なりと心得べし。

帶太刀は尺の伸ひたるは好まざるなり、大體一尺八九寸、二尺内外を宜しとし、脇指も八九寸、一尺を用ふへし、總て太刀刀は皆蛤刃に磨くべし、刃肉を落す事なかれ。

力量ある者は大太刀を用ふる事あり、帶難き程のしたたか物は下人に持たせ又は背負もするなり、此太刀は力量に任せて何程も大物を用ふべし。

鎗は徒鎗三寸穂にして、柄は丈夫に短きを宜しとす、是又敵を打倒す棒なりと心得べし、當世流儀々々を立て、華麗に制作したる鎗は戰場に用ゐるは只一打に打折べし、武士たる者心を用ふべし。

總て兵器には住國を漆を以て書付くべし、又急なるときは墨を以ても書し又小刀にて彫り付るも可なり。

馬は只腕爪の強きを貴ぶ、五性十毛の説或は相生相尅の吟味或は旋毛、馬形等の事などは少しも拘はる事なかれ、然しなから手に餘る悍馬は乘れざるものと心得べし。

木、火、土、金、水の五行と立て相生相尅を論ずるは唐山を本家にして其外は唐の弟子分なり、日本、朝鮮、暹羅、琉球等の國々而已なり、莫、歐、爾、百、爾、西、亞、印、第、亞、等、の諸國は地水火風を以て四行と言ひ、阿蘭陀及び歐羅巴諸國は水火氣土を以て四行と立たれば、此國々に四元行の説あつて五行の生尅なし、然れば何等に論じても、さのみ害もなき事と思はるれば、我黨も表立し議論には五行の説によるべし、荒氣

なる武用は其説に依らずとも然るべきか。

氣弱き馬にて水を渡すには、水際にて早駆四五遍乗て、其氣の脱けざる間に渡すべし、歩行にて急流を渡るには三四十人手に手を取組て渡るべし、水、冑を浸しても流れざるものなり。

歩行にて一人渡るには六七貫目の石を肩に荷ふて渡るべし。

泥を渡るには芳簀、竹簀の類を段々に打敷、其上に物を置て踏渡るべし、尤渡るに隨て段々に先へ繰るべし。

草鞋、馬轡等の作り様も人々心得居べき事なり、知らざる者は落度たるべし。

飯を炊くには、水一斗五升沸して米一斗打入る時は飯になり、又鍋釜なき時は芝の上にも米を置き、水を灑き懸て又上より芝くれを逆に打懸て、其上にて火を焚けば飯になり、又米を水に浸し、菰蔴の類につゝみ、淺く土中に埋め、其上にて火を焚けば飯になり、又米を水に浸し、桶に入れ、宜き頃の石を焼きて米中に打入るれば飯になり、又洗米を布袋に青葉を以て厚く包み、焚火の中に打入て蒸せば飯になり、又潮にて飯を炊くには、釜の底に茶碗を伏せ置き、其上へ米を入れて炊くべし、鹽氣は茶碗の中へ凝るなり。

水練の術心得居べし、知らざる者は落度なり。  
 野陣、宿陣共に己が小屋へ入る時は目の及ぶ丈見届置べし尤臥す時は何れの方を  
 枕になし、何れの方を跡にしたりと確と見届て心覺して臥すべし。  
 不意の事出来る時うろたへざる者なり、且又宿陣の時は宿はつれと宿裏の方をも  
 能々見届置くべし。

馬の芝繫き品々あり、一つは手綱にて前足を縛り置くなり、一つはナモカヒ鉤の髪中へ引寄  
 せ置くなり。

面頬なき時、平生の如く冑の緒を結ぶ時は願痛むなり、其時は下頤にて能き程に眞  
 結に結び止て、其餘は常の如く結ぶべし。

板障泥を二枚合せ拵て、水汲の具に用ふる事あり。

鐵砲を脇側に懸るには、筒先を下になして、左の肩より右の脇へ筋違に懸べし、懸り  
 口に肩の上より筒先を前へ引廻して敵陣へ一放打懸て、煙の下より切込時は一段  
 手ひごき懸り口なるべし、半弓を脇側に懸ける事は直に弦にて懸べし、但弦の方を  
 前にすべし。

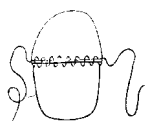
戰場へは竹筒に水を入れて胴脇に帶ぶべし。

草鞋は鷹野懸に著くべし。

足入深き地か又は大雪などを渡るには檣に乗るべし、其制二つあり左に圖す。



これは板かんしき也 板へ緒を付て  
 木履の制の如くする也



輪かんしきなり緒をもつて圖の如く  
 曲に真中に繩を懸る事圖の如しこれ  
 を足に付る也

水を渡るには臙當、佩立等を脱くとあり。

接戦の場にあらずとも、草鞋に中結すべし。

松明は檜の木最も善し、又乾細竹三四十本結束タヅメて用ゐるもよし、麻柄アサカサ三四十本も結束するもよし。

物見も大略を心得居べし、別に物見傳あり考合すべし。

### 戦場へ出る者の所持すべき品々

胴眼と言ふて厚綿の廣袖、羽織裏表共に桐油布を用ゆべし、又紙にても可なり、此品を鎧の上より打着れば寒をも防ぎ、雨をも凌ぎ、又夜具の代りにもなるなり、重寶の物とすべし、然しながら軍に臨んで急には製作仕難し、平日の心懸にて製し置べし。雨具は蓑笠なるべし、然れども之は定法なり、戦場にては何等の物にても手に當り次第引破りて雨を防ぐべし、但し雨を防ぐも押行く時の事なり、接戦に至ては大將士卒ともに、つぶ濡れと知るべし。

弦巻は指添の鞘へ貫て帯へ結付くべし。

打替袋に糒五六合、乾味噌少し入て常に腰間に帯ひ、肝要の時に非らざれば食ふこ



と勿れ、二重廻の手拭腰に纏ふべし。  
細引一筋腰に帯べし。

紙類何れの所へなりとも少し用意すべし。  
燧袋、此中へ氣付血留、艾、虫藥など馬藥等用意あるべし、此袋は刀脇指の栗形の所へ結付る也、偕又甲冑して大きに働く時は蒸氣逆上して眩ものなり、此時は辰砂益元散など甚だよし、其方滑石六匁、甘草辰砂各一匁なり、右細末水服す、此外昔武士の様子を見るに疵を被る時は、或は鹽を摺込又は直に炙したる事に見ゆ、これ又戰場意氣の療治なるへし。

軍中には時々大蒜を喰ひ、或は腰間に帯ぶべし、能く寒氣暑癘病を去るなり。  
扇子も心次第用意すべし。

麻紐にても長さ一尺二三寸の紐を拵へ、跡先に緒を付て腰間に帯べる飯入に用ふべし。

錢百文許緒に貫き腰の間に帯ぶべし。

右用具の大略なり、猶所持したき品は鞍の四方手或は鍔下などへ付くべし。

總て士卒等の心得べき事あり、萬一味方の大將討死せし時は早く死骸を負て味方

へ引取て其首を敵へ渡さぬ様にすべし、若し事急にして負て味方へ引取り難き時は爲すに忍びざる事なれ共、早く其首を討て面の皮を剝き又は頭を未塵に切碎さなごして、敵に得られて鼻首せられざる様に心懸べし、昔より大將討死したる時は附從せし郎黨共、悉く討死する而已にして首を隠す事を爲さざる故、首を敵に得られて鼻首せらるるなり、義貞討死の時も其首を深田の中へ隠したれども、其隠したる者又立歸りて義貞の死骸の側に切腹せし故、其足跡を糺たづして終に首を得られて鼻首せらる、たとひ打死したりとも鼻首さへせられねば討死の上の大慶と言ものり、可思々々、又士卒郎黨等の心得あり、義貞討死の時の如く無理なる働する時は強て馬を牽返して無詮討死を免れしむる事、士卒郎黨たしなみの心得なるべし。

## 第六卷終